言語文化研究　第１号　15-28　2022年３月
Language and Culture Research
Vol. 1 March 2022 pp. 15-28.

論　文

中国人大学院留学生の日本語習得における自律学習獲得プロセス

―― 複線経路・等至性モデル（TEM）を用いて ――

李　　燕

１．はじめに

教育のグローバル化を背景に、日本に来る外国人留学生の数が年々増加している。2019年にJASSOが発表した「外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、日本に在籍していた留学生は約31万２千人に上り、そのうち、５万人以上が大学院に在籍する留学生であった。筆者自身もそのうちの１人である。筆者は留学前、中国の大学で４年間日本語を学んだ経験があった。そして2019年に東京のＲ大学院に入り、日本語教育を専攻し、日本での研究生活を送り始めた。筆者は来日当初、日本語学習経験があるので、何とかなるだろうと気軽に考えていた。しかしながら、その後、筆者は日本語能力の不足によって、あらゆる面で壁にぶつかり、苦しんだ。順調に留学生活を送るには、日本語能力の向上が必要であると実感したが、大学院は学校活動も授業も限られており、日本語を話す機会が足らず、半年経っても自分の日本語能力がそれほど伸びていないことに気づいた。現在は、暗中模索ながら、周りのリソースを利用し、日本語を自律的に学習していくことが非常に重要であると自覚するようになったが、他の大学院留学生にも同様な自覚があるのかという問題意識を持つようになった。

佐々木（2006）によれば、近年の日本語教育には、教師主導型から学習者と社会との関係性を重視する自律学習へと大きなパラダイムシフトへの流れが見られると言う。そのような流れの中で、桜美林大学日本語プログラム（グループさくら 2007）では、学習者の著しい増加に伴い、日本語力の差だけでなく、アカデミック・リテラシーや基礎学力、動機づけ、ニーズなど学習者の個別性に関わる要因にどう対処するかが問題になった。これらの問題に一斉授業[1]では対処しきれないため、学習者が自らの問題に対して主体的に取り組めるよう、自律学習を授業に導入することが推し進められている。

義永（2018）は、学部留学生を対象とし、自律学習の育成を意図して、「学習記録」の実践

を行なった。その結果、学習記録を書くことによって、学習目標が具体化し、日本語力の向上に役立ったと評価した。そして、記録とコメントの交換を通じて教師との信頼関係が構築されたとも報告している。一方、学習意欲や計画性の向上、学習時間の増加を認めた学習者は比較的少なく、学習者の自律度を考慮した支援のあり方をさらに検討する必要があるとしている。

以上の研究から、留学生の大幅な増加によって、日本語学習者が多様化し、目的もレベルも様々であるため、従来の教師主導の一斉授業では一人一人のニーズを満たせず、教室内外で学習者が自律的に学んでいくことが求められていることが分かる。そして、学習者側からも教育者側からも、学習者の自律の育成や自律学習促進の必要性が認識されるようになった。しかし、日本で生活する社会的な存在としての留学生が教室内外のどの時点で、どのような経験をして、日本語の自律学習に辿り着いたのかというプロセスの可視化については、未だ問われていない。また時間の経過とともに自律学習を継続するか或いは諦めるか、その要因は何かということに関する検討は殆ど行われていない。これらの把握は、彼らの自律学習の支援や大学院での日本語教育の内容を考える上で重要な視点の１つであり、さらに掘り下げて研究する必要があると思われる。また、上述の研究は学部留学生を主な対象として議論されたものであり、大学院の留学生を対象とした研究はまだ少ない。

そこで、本研究では、日本の大学院で勉強している中国人大学院留学生Ｘさんの日本語自律学習の獲得プロセスを明らかにする。特に、彼が日本社会のどのような文脈（コロナ禍も含め）及び時間経過において、日本語自律学習を開始、中断、再開、維持するかという分岐点に焦点を当てて、考察していく。その結果を踏まえて、大学院留学生の日本語習得における自律学習の育成と向上に日本語教育がいかに貢献できるかを考えたい。さらに、留学生教育についても言及し提案する。

２．先行研究

２．１　自律学習に関する先行研究

自律学習に関する先行研究は多いが、ここでは、寅丸他（2021）とアプドゥハン恭子（2008）を概観する。その後、本研究における自律学習の定義を述べる。

寅丸他（2021）では、学内の全留学生とキャンパス内の各箇所に向けてより開かれた日本語自律学習支援機関となることを目指して、開室10年目を迎える2021年度「わせだ日本語サポート」[2]の現在とこれからの挑戦について述べている。その中で、留学生が日本語自律学習支援機関である「わせだ日本語サポート」を利用する実態が報告されている。具体的には、新型コロナの前、2019年の所属別利用者割合は、JLP（Japanese Language Program）[3]の留学生が75％と最も多く、次いで大学院生16％、学部生９％の順になっている。このデータから、日本語自律学習支援機関を利用して、自律的に日本語を学ぶ大学院留学生は少なくないと考えられる。

2020年度はCOVID-19[4]の感染拡大により、「わせだ日本語サポート」は一時停止し、四苦八苦する中、支援はZOOMによるオンラインでの活動に変わった。留学生により柔軟に寄り添う日本語の自律学習支援をするために、早稲田大学が様々な工夫をしていることが分かるが、コロナ禍で、日本語自律学習支援機関が公的活動を停止した時期に、留学生の自律学習状況がどうなっていたのか、どのような影響を受けていたのかということはまだ不明である。また、この報告は１つの大学に限定されており、日本語自律学習支援機関の支援を受けていない大学院留学生は何を利用して日本語を自律的に学んでいるのかも分からない。

アプドゥハン恭子（2008）は、学部留学生を自律的な日本語学習技能獲得に導く教育方法を考案するために、学部留学生11名（理工系）を対象に、どの程度自律的に学習を行なっているのか、自律的な学習者にはどのような特徴が見出されるかについて、縦断的聞き取り調査を行った。第１回聞き取り調査の結果としては、「自己評価における問題認識」、「困難に直面した時の対処」、「コミュニケーションへの積極性」の３点において明らかな差が見られ、自律的学習能力を持つと考えられる学習者（グループ１）と、持たないと考えられる学習者（グループ２）の２つに分けられた。調査結果から、グループ１の学習者はかなり自律性を備えていると考えられた。それに対し、グループ２の学習者で日本語能力が不十分だと感じている者は、日本語によるコミュニケーションに自信がなく、人間関係構築に消極的であることが見られた。即ち、日本語力があっても、積極的に日本語を使って日本人と交流する意欲が薄く、自律性を備えていないことが分かった。

しかし、この研究の調査対象は理工系学部の留学生に限られており、文系の大学院留学生の場合も同じ研究結果が得られるかは分からない。したがって、文系の大学院留学生を対象としてこの研究結果を検証する必要がある。また、自律学習において、留学前、来日後、留学中、留学後という時系列によって、学習者は具体的にどの時点で、何を目的として、どのような影響によって、自律学習を中断するか、維持するかというプロセスについては、まだ分析されていない。

２．２　本研究の自律学習の定義

桜美林大学日本語プログラム（グループさくら 2007：22）において述べられている、従来の教室の枠組みにとらわれず、自らの学びを構築していくための自律学習とは、以下のようなものである。

それは、まず、自分がどのような状況下にあるのかを認識し、その上で自分に必要な日本語を見つけ出し、次に、周りのリソースを利用しながら自分のニーズにあった学習を自律的に進めていくプロセスである。

小川（2016：75）では、自律学習に対しての解釈（青木 2006：138；Little 1991：14；Little 2004：29）において、共通する主要な要素を以下のようにまとめている。

①学習者が自分自身でコントロールする学習
②学習者が自分自身のためにする学習
③仲間や支援者、その他のリソースと協力し、交渉しながら社会的営みとして行う学習
④知識や技術を教師からもらうのではなく、自らが構築していく学習

上記の自律学習に対する解釈に基づいて、本研究では自律学習を以下のように定義する。
「自律学習とは、自分がどのような状況下にあるのかを認識し、その上で自分に必要な日本語を見つけ出す。そして、自らで学習を構築して行くために、周りのリソースを利用しながら自分のニーズにあった学習を自律的に進めていくというプロセスである。」

３．研究課題

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、日本の大学院で学んでいる中国人留学生Ｘさんの日本語習得における自律学習獲得プロセスを明らかにする。そのため、次の研究課題を設定した。

研究課題１：中国人大学院留学生Ｘさんは日本社会の文脈の中で、どのような苦悩や経験を経て自律学習を開始したのか。またどのような時間経過の中で、学習を中断・維持したのか。さらに中断後、どのように努力して再開し、自律学習に辿り着き・維持したのか。以上のプロセスを明らかにする。

研究課題２：コロナ禍において、彼らの日本語自律学習はどのような影響を受けているか。

４．調査概要

４．１　調査対象

本研究の調査対象は日本の大学院で学んでいる中国人留学生Ｘさんである。中国人留学生を対象とする理由は以下の３つである。

(1) 日本国内における全外国人留学生の中では中国人の数が最も多いため、研究する意義がある。
(2) 筆者が中国人であるため、自らの体験と比較して考察しやすい。
(3) 対象者は筆者と同じ寮に居住しており、すでに一定の信頼関係が構築され、スムーズに調査が行えると考えられる。以下の表は調査対象者Ｘさんのプロフィールである。

表１　Ｘさんのプロフィール

性別・年齢	男性・20代後半
所　　属	法学研究科在籍（博士後期課程２年生）
日本語学習歴	留学前に大学主専攻として４年間＋留学してから現在まで１年５ヶ月
日本滞在歴	１年５ヶ月

４．２　調査方法と分析データ

2020年10月～ 2021年２月にかけて、対面で半構造化インタビューを２回実施し、TEM（Trajectory Equifinality Model）を作成した。完成したTEM図が妥当であるかを、調査対象者にチェックしてもらったが、COVID-19感染拡大の影響で、このチェックの作業はオンラインで行った。さらに修正したTEM図の内容に関して再度調査対象者に確認してもらい、調査対象者と調査者の認識を一致させた。

インタビューの質問と応答は中国語を使用し、調査対象者の許可を得た上で、携帯のボイスメモで録音し、文字化した。インタビューの録音記録、及びその文字化資料を、分析データとして使用し、主にXさんの日本語習得における自律学習獲得プロセスに関する内容に焦点を当て、データを抽出した。

表２　主な質問項目

①留学前から留学後にかけて、調査協力者が日本社会という文脈に置かれて、どのような苦悩や経験を経てきたのか、どのような問題に直面して、自律的に日本語を学ぶ重要性に気づき、学び始めたのか。
② COVID-19感染拡大は彼らの日本語自律学習に影響を及ぼしているのか。
③直面している難題や戸惑いをどのように努力して乗り越え、どのような時間経過において自律学習を中断・維持するのか。
④自律学習を中断・維持した要因は何か。

４．３　分析方法

本研究の分析方法としては、複線経路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下、TEM）を用いた。TEMは時間を捨象せず、ある出来事をどのように経験したのか、そのプロセスを理解しようとする質的分析方法の１つである。TEMは人間の社会化・発達・成長を時間経過と背景文脈とともに記述し、主要な概念ツールとしては分岐点（Bifurcation Point：BFP）、複線経路（Trajectory）、等至点（Equifinality Point：EFP）がある。等至点とは人が多様な経路を歩み進める中で等しく辿り着いたポイントで、分岐点とは時間が継続する中で分岐するポイントである。TEMは、等至点に至るまでに、どのような行動を選択し、選択の背景にはどのような歴史的・文化的・社会的な影響があるのか、また、本人の意識はどのように変容していったのかを明らかにできる手法である（安田・サトウ 2012：3；安田・滑田他 2015：12）。

また、TEMでは、研究対象が１人の場合、個人の経路の深みを探ることができる（安田・滑田他 2015：166）。本研究では、調査対象Xさんが、日本語自律学習を継続するという経験に辿り着くまでの経路の深みを描くのに相応しい分析手法として、TEMを採用した。

５．分析結果と考察

本節では、まず、Ｘさんの日本語習得における自律学習獲得プロセスの結果を以下のTEM図にまとめた。次に、TEM図に基づき、第１期、第２期、第３期、第４期と区分をし、時系列に沿って分析結果の考察を行った。

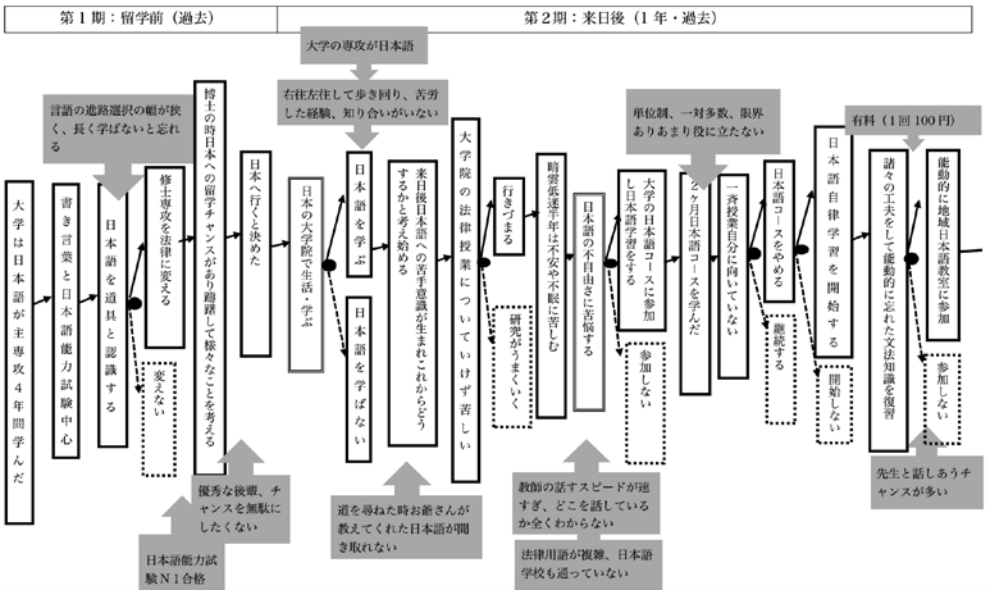

図１　Ｘさんの TEM 図

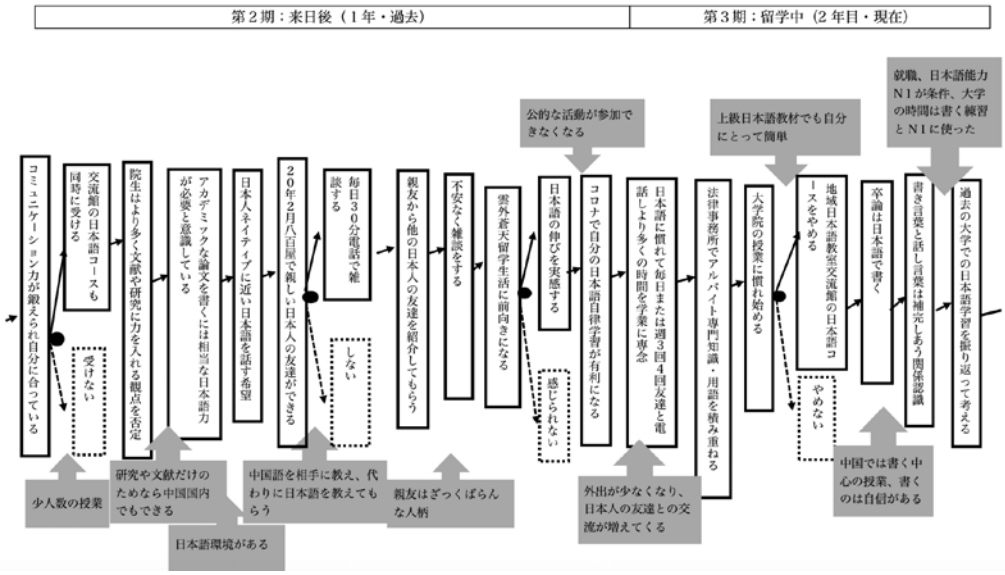

図２　Ｘさんの TEM 図

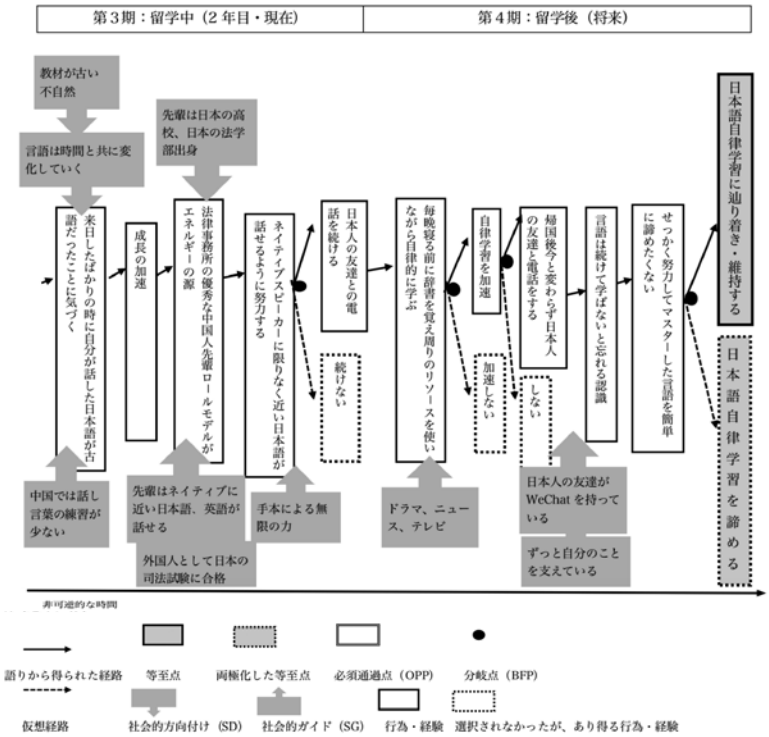

図３　Ｘさんの TEM 図

Ｘさんの第１期（留学前・過去）は、日本語を学んだ経験があり、留学前に能力試験 N1を取った時期である。具体的には、彼が大学生の時、日本語を主専攻として４年間勉強した時期である。その４年間は書き言葉と日本語能力試験対策を中心に学んだ。日本語は彼にとって、ただのツールでしかないため、言語以外に他の専門知識やスキルが必要だと認識していた（〈言語の進路選択の幅が狭く、長く勉強しないと忘れる〉SD）。そこから（〈修士専攻を法律に変える／変えない〉BFP）という分岐点が現れ、彼は変えることを選択した。博士課程の時、日本への留学チャンスがあり、躊躇したが、様々なことを考えて日本へ留学することを決めた（〈日本語能力 N1合格〉SG）、（〈優秀な後輩、チャンスを無駄にしたくない〉SG）。つまり、留学前に様々なことを考えたが、未知の留学における言葉による困難についてはあまり考えていなかったということである。

第２期（来日後１年）は暗中模索をしながら、留学前に気づかなかった面に気づき、自分なりに解決方法を模索し、闘い、自律学習を開始し、努力した時期である。また、彼のストーリーの山場でもある。

日本の大学院での生活・勉学には日本語が必要であることを、彼は実際に日本に来て日本社会での経験を経て気づいた。来日後、日本語への苦手意識が生まれ、なぜ自分の日本語がこれほど下手なのか、ということから、これからどうするかまで考え始めた（〈道を尋ねた時お爺

さんが教えてくれた日本語が聞き取れない〉SG)。そして、大学院の法律の授業について行けず、苦しんだ。日本語力の影響で、(〈研究が行き詰まる〉BFP）という分岐点に達した。来日してからの半年は、暗雲低迷から不安を抱え、不眠に苦しむ毎日を送り、彼は日本語の不自由さに苦悩した。(〈大学の日本語コースに参加し、日本語学習をする／参加しない〉BFP）という分岐点が現れ、彼は日本語学習をすると選択した（〈先生の話のスピードが速すぎ、どこを話しているか全くわからない〉)、(〈法律用語が複雑、日本語学校も通っていない〉)。しかし、(〈単位制、一対多数、限界ありあまり役に立たない〉SD）という社会方向づけにより、２ヶ月日本語コースを勉強したものの、自分に向いていないことに気づき、(〈日本語コースをやめる／継続する〉BFP）が現れ、彼はやめることを選択した。またそこで（〈日本語自律学習を開始する／開始しない〉BFP）という分岐点が現れ、X さんは自律学習開始を選択した。自分なりに諸々の工夫をして忘れた文法知識を自分で復習したりしていた。次に（〈能動的に地域日本語教室に参加／参加しない〉BFP）が現れ、彼は参加を選択した（〈先生と話し合うチャンスが多い〉SG)、(〈有料、１回100円〉SD)。地域日本語授業では、コミュニケーション力が鍛えられ、自分に合っていると認識した（〈少人数の授業〉SG)。また、そこでは（〈交流館の日本語コースも同時に受ける／受けない〉BFP）という分岐点が現れ、彼は受けることを選択した。そして、院生はより多くの文献講読や研究に力を入れるべきだという観点を否定した。さらに、アカデミックな論文を書くには、相当な日本語力が必要と意識した（〈研究や文献講読だけのためなら中国国内でもできる〉SG)、(〈日本語環境がある〉SG)。なぜなら、はるばる日本に留学しに来たのだから、日本語ネイティブに近い日本語を話したいと彼は考えるようになったからである。2020年２月、八百屋で親しい日本人の友達ができた（〈中国語を相手に教え、代わりに日本語を教えてもらう〉SG)。そこからは、(〈毎日30分電話で雑談する／しない〉BFP）が現れ、彼は雑談することを選択した。親友は他の日本人の友達も紹介してくれた。不安なく、雑談をする（〈親友はざっくばらんな人柄〉SG)。それらの経験を経てから、雲外蒼天５と考え、彼は留学生活に前向きになった。(〈日本語の伸びを実感する／感じられない〉BFP）という分岐点が現れ、彼は日本語の伸長を実感できるようになった。新型コロナウイルス感染拡大によって、(〈公的な活動に参加できなくなる〉SD）ことから地域日本語コースや交流館の日本語授業が受けられなくなったが、しかし（〈外出が少なくなり、日本人の友達との交流が増えてくる〉SG）ことによって、コロナ禍であることで逆に自分自身の日本語の自律学習にとって、有利になると認識した。

第３期（留学中・２年目現在）は、日本語に慣れて、友達との電話が毎日ではなく週３回、４回となって、より多くの時間、学業に専念している。つまり、彼は自分の状況がよくわかっていて、自らの人生を主体的に生き、日本語を自律的に学ぶために、自ら考え、選び、学習を進めている姿勢が見られる。その後、法律事務所でアルバイトをしながら、専門知識や用語の学習を積み重ねたことで、大学院の授業に慣れてきた。そして、(〈地域日本語教室、交流

館の日本語コースをやめる〉BFP）ことを選択した（〈上級日本語教材でも自分にとって簡単〉SD）。卒業論文を日本語で書くことを通して、過去の大学での日本語学習を振り返って考えた（〈中国では書く中心の授業、書くことには自信がある〉SG）、（〈就職日本語能力N1が条件、大学の時間は書く練習とN1に使った〉SD）。来日したばかりの頃に話していた日本語はあたかも古代の日本人が話す言葉のようだったと気づいた。（（〈教材が古い、不自然〉SD）、（〈言語は時間とともに変化していく〉SD）ことは阻害の要因となるが、しかし〈中国では話し言葉の練習が少ない〉SG）ことが彼の自律的な会話参加を促した。即ち、過去の経験が彼の現在を支えており、彼は現在の経験を過去のことに基づいて内省していると言えるだろう。自己成長は加速し、法律事務所での優秀な中国人の先輩がロールモデルとなって彼のエネルギーの源となり、自分自身も先輩のようにネイティブスピーカーに近い日本語が話せるように努力した（〈先輩はネイティブに近い日本語、英語が話せる〉SG）、（〈外国人として日本の司法試験に合格〉SG）。ところが、（〈先輩は日本の高校、日本の法学部出身〉SD）であることから、いくら自らが努力しても彼のレベルになることは難しいと考えるようになった。つまり、先輩のことを通して、Xさんは自分自身の日本語能力のレベルが分かるようになったということである。そのことによって、彼はネイティブに限りなく近い日本語能力が習得できるよう、日本語自律学習を継続するという決心をしたと言えるだろう。そこから（〈日本人の友達との電話を続ける／続けない〉BFP）が現れ、彼は続けることを選択した。

第4期（留学後　将来）は、日本語自律学習を継続し、維持する時期である。具体的には、毎晩寝る前に、辞書の単語を覚え、周りのリソースを使いながら、自律的に学ぶ（〈ドラマ、ニュース、テレビ〉SG）。また（〈自律学習を加速／加速しない〉BFP）から彼は加速を選択した。（〈帰国後も現在と変わらず日本人の友達と電話をする／しない〉BFP）という分岐点が現れ、彼はすることを選択した（〈日本人の友達がWeChatを持っている〉SG）、（〈ずっと自分のことを支えている〉SG）。そして彼は、外国語は続けて勉強しないと忘れるという認識を持っている。さらに、せっかく努力してマスターした言語を簡単に諦めたくないため、今後も継続するということで、最後に彼は日本語自律学習に辿り着き、維持するというプロセス結果を得た。

6．まとめ

本研究では、人間の成長の時間的変化を社会や周辺環境との関係で分析する複線経路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を使い、日本の大学院で学んでいる中国人大学院留学生Xさんの日本語習得における自律学習の獲得プロセスを明らかにした。そして、同時期に同じように調査を行った中国人大学院留学生3名の獲得プロセスを合わせて、総合的に分析した結果から、次のような自律学習を獲得するプロセスモデルを導き出した。

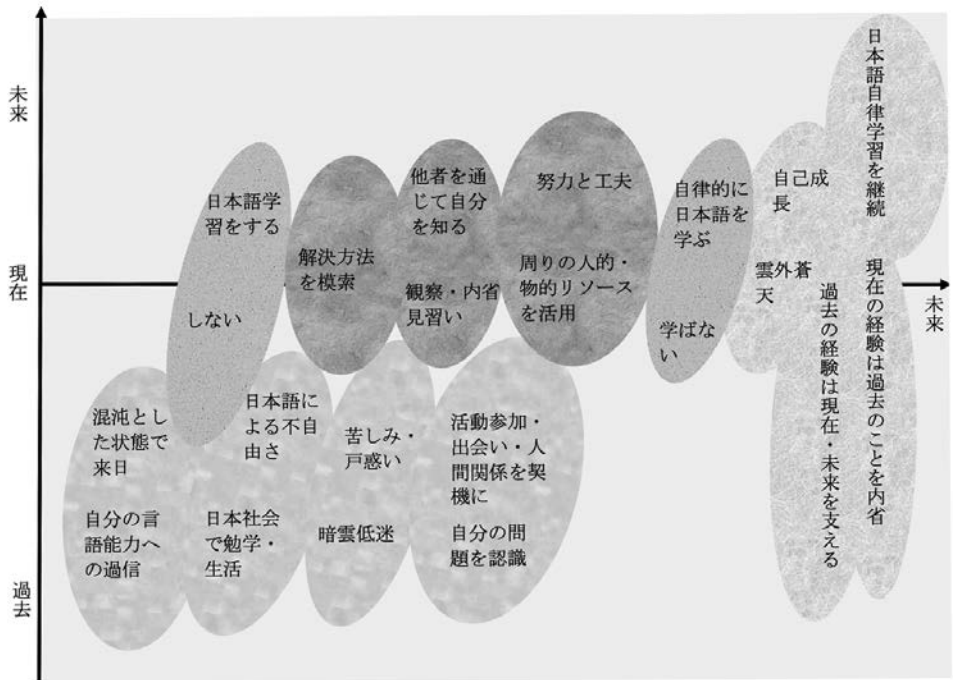

図４　中国人大学院留学生の自律学習のプロセスモデル

図４に沿ってＸさんの自律学習のプロセスをまとめてみたい。まず、Ｘさんは留学前に中国で日本語を主専攻として４年間勉学した経験があり、自分の言語能力を過信していたことが分かった。しかし、来日してから、自分自身の聞く力と話す力がそれほど上手くなく、むしろ下手であるということに気づいた。具体的には、道を尋ねたとき、お爺さんが言ってくれた言葉が全然聞き取れなかったり、法律の授業で先生が何を話しているか全くわからなかったりした。その半年は、暗中模索で、日本語で交流することの不自由さによる不安を抱え、不眠に苦しむ毎日を送っていた。そのため、大学院の日本語コースを受けたが、自分自身のニーズに合わず、話し合うチャンスがないという理由でやめ、日本人の友達との電話、法律事務所のアルバイト、地域の教室や交流館の日本語授業などを通して自律学習を開始した。このＸさんの事例から、提供される授業は完全に自分自身の目的に合うものばかりではないので、自らで考えて、選んでいき、自分自身に合った学習の仕方を考え出すことが重要な課題になると考えられる。

また、その半年後、日本人の友達ができ、毎日30分以上、能動的にその友達と電話を通して、日本語で喋った。その時期も彼の自律学習の加速期であった。徐々に自分自身の日本語が上手になり、友達との電話を以前より減らして、専門科目の学習に専念した。法律事務所でアルバイトし、専門用語の習得を積み重ね、授業などに慣れ始めたものの、一時は暗雲低迷が続いたが、しだいに努力したことで、道が開け、充実した生活を送っている。また、法律事務所

で知り合った中国人の先輩は日本語母語話者に限りなく近い日本語を話せるように努力している。ここでは先輩を見習うことが日本語自律学習を継続する主な要因となっている。X さんは現在も一生懸命、自律的に日本語を学習している。さらに、将来帰国しても日本人の友達と電話を続け、せっかく努力してマスターした言語であるため、今後も自律学習を継続するということである。いわゆる社会や文化の文脈の中で、X さんは自分の弱みを認識し、困難と闘い、最終的には乗り越えた。日本の大学院という社会を通して、思考し、内省し、自らを捉え直したことで、日本語自律学習が加速し、最後は「日本語自律学習に辿り着き、維持する」という等至点に到達した。

一方、新型コロナ感染症の流行による社会の変化が、中国人大学院留学生 X さんの日本語自律学習の獲得プロセスに影響を及ぼしていることが分かった。主な影響は、X さんが地域の日本語教室や交流館の日本語コースに参加できなくなったことである。この間、X さんは日本人の友達とのビデオ電話を増やして、自律的に日本語学習を継続した。彼は新型コロナ感染症による外出自粛が、かえって自分の日本語自律学習を促進したと捉えている。なぜなら、自粛期には、日本人の友達が家にいる時間が多くなったため、彼との電話による交流が増えてきたからである。結果的に、彼の自律学習獲得プロセスにはコロナ禍の影響は少なく、公的な活動に参加できなくなった程度であったと言える。

中国人大学院留学生 X さんの獲得プロセスは、一見すると苦境から日本語の自律学習に辿り着いた成功のストーリーとして捉えられがちである。しかし、その過程にある様々な選択の裏側には、留学生活及び法律という専門の授業や研究に対する不安、または日本語の不自由さによる自己否定などという消極的な経路が見られる。本研究における TEM を用いた自律学習の獲得プロセス分析の趣旨は、自律学習に辿り着いた成功例を示すことではなく、その危機的状況を可視化することで、それへの対策や支援を検討するものである。また、時期区分において、日本語自律学習に関する分岐点、個人の選択がいかになされていたのかを明確にした。それによって自律学習に辿り着いたプロセスを可視化し、共有することの意義は、大学院留学生が立脚する日本社会との関係を捉え直し、将来展望を描くための動力となると考えられる。

7．留学生への日本語教育への示唆と今後の課題

本研究の分析結果から、留学生の日本語教育に向けて次のような可能性が示唆しうる。

1）日本社会や組織などにおける日本人との交流活動が、在日留学生の日本語自律学習を促進する要因になる。岡崎・岡崎（1990：134）は、「言語は言語だけで成立せず、コミュニケーションの中にあってこそ現実的な意味があろう。またコミュニケーションはコミュニケーションだけで成立せず、社会や文化を背景にした生活や人間関係の中にあってこそ現実的な意味があろう」と指摘している。即ち、日本人コミュニティや日本人との交流活動、日本文

化イベントに参加する機会を設けることが現実的な意味を持つコミュニケーションになり、自律学習支援にもなると言えるであろう。

2）大学院の日本語コースでは、異なる年代や多様な学習者が同じ環境で学び、授業においては、他者の刺激と支えを通して、多様な思考形態に触れながら、自己の問題点や話す時に感じる難点は何かを考えさせ、乗り越える経験をさせる場を提供することが重要だと考えられる。いわゆる、他者を観察・見習いながら、自分の問題に気づき内省するような授業こそ、学習者の自律学習の育成や向上にもつながっていくと思われる。

3）Xさんは留学前に4年間日本語を勉強した経験があり、色々と考えたが、しかし未知の留学における言葉による困難についてはあまり考えていなかった。来日後は、予想と違って自分の聞く・話す力がそれほど上手くなく、むしろ下手であると気づいたことによって、様々な苦悩・葛藤を経験した。このことから、来日前の留学生教育についても、更なる検討の必要があると考えられる。

今後は、全体像をさらに精緻化するために、被調査者数を増やして分析するほか、日本語自律学習を中断したまま、または完全に自律学習をやめた大学院留学生を分析の対象とすることを考えている。彼らが自律学習をやめた要因を知ることで、より深い示唆と提案が得られるだろう。また、今回の調査では、大学院留学生Xさんは留学前に言葉による困難についてはあまり考えていなかったことが分かった。そのため、今回得た留学生の自律学習を獲得するプロセスモデルをもとに、留学を志望する学生のために、留学前の事前学習を支援する情報を発信したり、自律学習のためのテキストを作成したりすることも、今後の課題である。

【注】

1　教師が一人で、大勢の学習者に対して授業をするというもの。
2　2011年に早稲田大学内に開設された日本語自律学習支援機関である。
3　LPは早稲田大学の提供する「日本語教育プログラム（Japanese Language Program）」を略した言葉。
4　2019年に発生した新型コロナウイルス感染症を略した言葉である。
5　努力して乗り越えた先には、明るい未来がある。

【参考文献】

青木直子（2006）「教師オートノミー」（春原憲一郎・横溝紳一郎編著）『日本語教師の成長と自己研修：新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』凡人社，138–157.

アプドゥハン恭子（2008）「学部で学ぶ留学生の日本語自律学習過程について―縦断的聞き取り調査の分析」『専門日本語教育研究』10号，41–45.

荒川歩・安田裕・サトウタツヤ（2012）「複線経路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25号，95–107.

岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社，133–145.

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習―さくら先生のチュートリアル』凡人社，10–126.

小川都（2016）『「自律学習」を促す「学習者参加型」日本語教育について―学部留学生のエンパワーメントを引き出す「ワークショップ型」学習による日本語授業の事例研究を通して―』博士論文，東京首都大学，URL.https://acaddb.com/dissertations/articles/619530.

佐々木倫子（2006）「パラダイムシフト再考」国立国語研究所（編）『日本語教育の新たな文脈―学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』アルク，259–282.

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「2019年度外国人留学生在籍状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2019.html（最終アクセス2021年５月10日）

寅丸真澄・吉田好美（2021）「『わせだ日本語サポート』の挑戦―全留学生に開かれた日本語自律学習支援を目指して―」『早稲田日本語教育実践研究』９号，３–10.

安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開―』誠信書房，3–239.

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（2015）『ワードマップ　TEA 理論編―複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ―』新曜社，12–196.

安田裕子（2015）「コミュニティ心理学における TEM/TEA 研究の可能性」『コミュニティ心理学研究』１号，62–76.

（り　えん：城西国際大学大学院人文科学研究科修士課程グローバルコミュニケーション専攻
2021年度修了）

Abstracts

The Process of Japanese Language Acquisition via Self-Guided Learning by a Chinese Graduate Student: Using the Trajectory Equifinality Model（TEM）

Li Yan

In this study, the process leading to Japanese language acquisition via self-learning is analyzed using the Trajectory Equifinality Model（TEM）. This study follows a Chinese graduate student, "X," during the SARS-CoV-2 coronavirus pandemic. Before arriving in Japan, "X" was unaware of language barriers, however, immediately after arriving, "X" realized how inconvenient it was to not be able to interact in Japanese, which brought about anxiety. Although "X" took a Japanese language course offered at the graduate school, there were not many opportunities to practice conversation and "X" started a self-guided learning program. "X" was independently learning Japanese by participating in video calls with Japanese friends and classes offered at community centers. Furthermore, other Chinese individuals who have been living in Japan for longer also played a major role in encouraging "X" to continue his self-guided studies of Japanese during and after studying abroad. Eventually, "X" was able to recognize his shortcomings, seek out a solution, and discover an effective method of self-guided Japanese learning influenced by the surroundings and the people in his immediate environment.